

要 旨

本稿では、千葉県文書館（以下「文書館」という。）を事例として、ISAD(G)の導入をめぐる諸問題を抜き出し、その解決方法を実務的な視点から検討した。はじめに文書館の現状と ISAD(G)をめぐる日本国内の研究動向を把握した。ついで、ISAD(G)導入について課題点を抽出し、解決策を提示した。その上で、ISAD(G)を適用させた web 検索・目録において、利便性向上のあり方について言及した。

文書館の収蔵文書それぞれの特徴や、これまでの整理方法の蓄積を考慮すれば、ISAD(G)導入による業務の急激な変化は、避けるべきであろう。かつ、文書館として包括的に統一された目録編成・記述は、それぞれの文書の性格から不可能であることを前提に検討を進めた。

ISAD(G)による目録編成の方針をそのまま適用すれば、文書館収蔵の公文書・古文書とも大量のシリーズが発生して、利用者にとっての利便性向上には結びつかない。そこで、本稿においては、公文書・古文書それぞれに対して、問題解決を図った。問題解決の方法において、両者に共通するのは、ISAD(G)が想定していない文書の分類指標として、「地域」と「年代（年度・時代）」という概念を取り入れ、目録編成を行った点にある。

具体的には、県庁文書では組織構造をもって文書群の内的な構造として、フォンド以下の階層を設定した。しかし、所属の数が多く、組織変遷や分掌事務の変化に対応することが困難であることから、「年度」別に組織構造を web 上に表現することで、問題の解決を図ることとした。

古文書については、大量のフォンドとシリーズが設定されてしまうという問題に対して、各文書群（フォンド）を「地域」性によって分類した。かつ、シリーズについても近世あるいは近代という時代区分と公的文書が私的文書かを軸にしながらか、内容による項目の細分化を回避する方法を提示した。

最後に、自由に編成を変更して表示できるという Web 上の性格を利用して、公文書と古文書の目録の情報共有を図る手法を提示した。

県庁文書内に存在する文書群については、県庁文書として階層構造の中に組み込むだけではなく、「郡役所文書（県庁文書）」と、県庁文書であることを明示しつつ、独立したフォンドとして扱うことで、利便性の向上を図ることとした。これは、県庁文書内だけではなく、家わけ文書の中に収録された公文書にも適用できる。明治初年を中心に県庁文書は現存数が少ない。これを補う情報として、家わけ文書に収録された公文書は有用であり、県庁文書の階層構造から表示することで、横断的な検索が可能となる。

以上を踏まえれば、文書館において、ISAD(G)導入のメリットとは、従来の文字検索だけではなく、文書の階層構造や地域及び年代別等の多角的な検索が可能となる点にある。また、ジャパンサーチに代表されるような、他機関とのデジタルアーカイブ上での連携において、目録編成の「標準化」を行うためにも ISAD(G)の導入は、文書館にとって重要な課題となる。

なお、本稿は個人的な見解であり、千葉県及び千葉県文書館の見解ではない。